

『求める手 差し出す手』 ～学生の力を地域へ～

那須烏山市（大金台）
キャンナス烏山 横山 孝子

27班 コミュニティデザイン学科 見持亮太 小松友広
建築都市デザイン学科 青木渉 ブチャーアニー
社会基盤デザイン学科 福井慎之介

◆背景 ～大金台の歴史と現状～

栃木県那須烏山市の大金台はバブル期に別荘地として有名になり、土地の高騰や町の発展の見込みがあったので多くの人々が土地の購入した。さらに、土地を購入し別荘としてだけではなく、交通など整備されると聞いて、安心して移り住む。しかし、バブルの崩壊によって資金が回らず、町の整備も謳われていたようには実現しなかった。残りの土地も売れないまま、大金台に移り住んだ家族の子供たちは成長し、離れる。結果交通手段が少ない中、高齢者のみが残し、空き地/空き家も手付かずのままになっている状態。

このような状況で困っている高齢者を助けるのが、有償ボランティアのキャンナス

◆目的

地域の「困った」声を拾いあげるには？

- ★キャンナスでは拾いきれないもの…
- ★学生にしか拾い上げられないもの…

特に大金台では主に交通手段が困っていることが現地訪問で分かった。この課題をどう解決できるか、ヒントになるものを得られるようにしたいと考えた。

さらに交通の不便さという問題以外には困っていることはあるだろうか？これらを知るために調査をしようと考えた。

そして、地域の高齢者の困っている声を拾い上げるシステムを作るためには何が必要か？

◆方法

- 現地調査(ヒアリング調査)
 - ・訪れて直接状況を把握
 - ・今後どのようにしたいか確認

➡人や地域によって差がある…意志の尊重

■ワークショップ

大金台ふれあいの里の方々と厳密的な項目を設定し、ワークショップを行う。大金台の課題と将来像をつかめるように。

項目は以下のとおりである。

- ・ 大金台の好きなおところ (継続していきたいこと)
- ・ 嫌なおところまたは改善したいところ
- ・ 将来の大金台の理想像
- ・ 学生がくる場合にしてほしいこと、一緒にしたいこと
- ・ 学生が来てほしい頻度



写真1 ふれあいの里ワークショップの様子

◆分析結果

大金台ふれあいの里でヒアリングとワークショップを行った。ヒアリングでは直接困っていることについて聞いたりそれをどのようにやり過ごしているかを聞いた。以下がほぼ全員が同意した意見である

- ★デマンドタクシーが使いづらい
 - ★ゴミ出しが不便
 - ★買い物がしづらい
 - ★病院が遠い
- etc…

このように交通手段がないゆえに困っていることが多かった。

ワークショップを行った際には、ヒアリング調査を基に項目を決定して話し合いを進めた。

以下がワークショップを行った際の項目と結果である。

表1 ふれあいの里のイメージ

大金台の好きなおところ、継続したいもの	大金台の嫌なおところ、直したいところ
自然豊か	交通の便が悪い
空気がいい	道が迷路のようで迷いやすい
静か	高齢者ばかり住んでいる
住民同士が仲がいい	自治会に入っていない人がいる

◆提案

継続的に若者が入り続けるには、若い人たちも来くなるようなものはないかと、住民ならではの意見を聞いてみた。

那須烏山市、大金台にはいいところがたくさんあって、すでに様々なイベントが開催されている状態である。

提案の第一段階としては、空き家や空き地を利用した宿泊施設やキャンプ場として貸出し、プチ別荘・プチホームステイとして人に来てもらう。これは実現するにはまだ時間がかかりそうなので、大金台ふれあいの里の公民館でスタートを切っていく。

・ 将来の大金台の理想像

- 発展させたい ➡大金台の交流
- 現状維持 ➡人間関係が良いのでそのままがいい

- ・ 学生がくる場合にしてほしいこと、一緒にしたいこと
- ・ 若い人の考えていることを教えてほしい！
- ・ 烏山の良さを伝えたい
- ・ 学生が来てほしい頻度 年に数回……持続すると尚よい★

若者に来てほしい理由が若くて世代の違う人たちと交流したいという声が非常に多かった…なぜか？

- ・ 若者と話して学びたい
- ・ 世代間交流
- ・ 話すことによってさまざまな問題解決につながっていくのでは…

那須烏山市の高齢者の問題解決をしていくには、力のある若い人たちの出入り、そして交流がとても大切になってくると考えられる！

継続的に若者が入り続けるにはどうしたらよいか？

そもそも若者が少ない理由は？
➡若者が地域に入ってこれる仕組みづくり。(若者や学生が来なくなるような)

さらに、次の段階として【図1】に例を挙げたが、学生と地元住民で協力し合ってこのようなマップを作り上げていったり、イベントを盛り上げていったりすることによって若い人と高齢者のつながりが生まれつつ、さらに地域活性化にもつながってくると考えた。

このように、若者と地域の人々や高齢者たちをつなげることによって、お互いの状況についてもよく知ることができる。徐々に、困っているSOSをすぐに発信できるシステム《地域の絆》を構築できると考えられる。



図1 まちあるきマップ展開案

解決への仕組み

高齢者が多い
↓
困り事が多い

若い人と交流
↓
徐々に解決

イベントや
マップ作り等
多世代の協力